



Web連載

注目！ がん看護における
最新エビデンス



南 理央
東北大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 緩和ケア看護学分野
博士課程前期2年

第50回

「録音してもよろしいですか？」 腫瘍内科における患者からの 診療録音依頼に関する意識と実践

Rachel B. Jimenez, Andrew E. Johnson, Nora K. Horick, Fay J. Hlubocky, Yvonne Lei, Cindy B. Matsen, Erica L. Mayer, Deborah E. Collyar, Thomas W. LeBlanc, Karen Donelan, Michelle M. Mello, and Jeffrey M. Peppercorn. Do You Mind If I Record? : Perceptions and Practice Regarding Patient Requests to Record Clinic Visits in Oncology. Cancer. 2022 January ; 128 (2) : 275-283.
Doi : 10.1002/cncr.33910

今回紹介するのは、今やほとんどの人が持っているスマートフォンでもできる「録音」に関する研究です。皆さんは、医者から自分や家族の病期や治療に関する説明を受けたことはありますか。医療者からの説明は、健康や病気に関する重要な話であるにもかかわらず、専門用語が出てくることも少なくなく理解するのが難しい・覚えていられないということもあると思います。もし、それが重大な病名の告知であれば、ショックで頭が真っ白になり「どうやって家に帰ったかさえ覚えていない…」ということもあるでしょう。生活習慣の指導であれば、医療者の説明を録音しておくと同席できなかつた家族の協力を得やすいかもしれませんし、録音を聞き直すことで頑張ろうという気持ちを継続しやすくなるかもしれません。患者にとって、録音という方法はとても有効なように思えます。

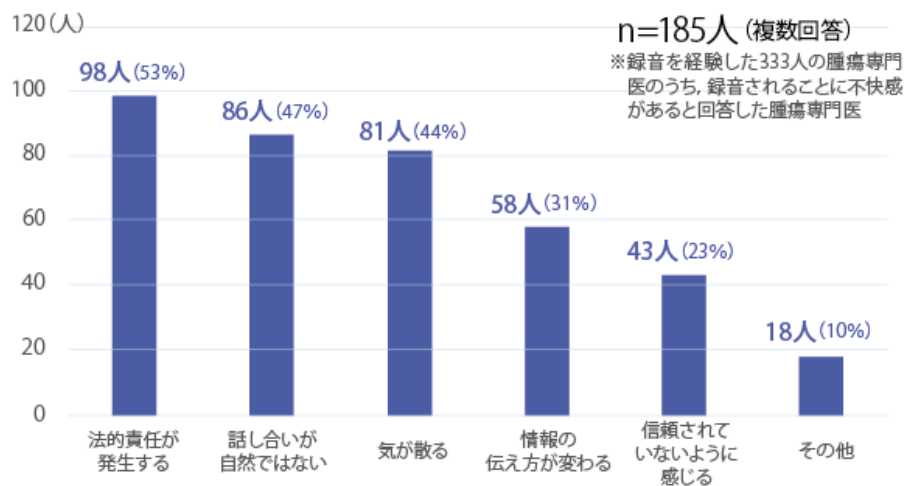
今回紹介するのは、患者が医師の説明を録音することについて、"医者はどのように思っているか"を調べた研究です。アメリカの5つの施設の524人の腫瘍専門医を対象にインタビューとアンケート調査を行いました。では早速、医療者は"録音"につ

いてどう思っているか、結果を見ていきましょう。

「これまでに録音されたことがありますか？」という質問では、腫瘍専門医の93%が"はい (Yes) "と回答しました。「どのくらいの頻度で録音許可を求められますか？」には、"常に (Always) "が34%、"いつも (usually) "が51%でした。「どのくらいの頻度で録音を許可しますか？」には、"常に (Always) "が85%、"いつも (usually) "が11%でした。この結果は、実質すべての腫瘍専門医が患者の録音を経験し、腫瘍専門医が患者の録音を受け入れていることを示しています。

一方で、専門医の15%が記録を制限または拒否し、さらに17%が録音によって情報の伝達方法が変わると回答しています。そして、録音を経験した専門医333人のうち185人 (56%) が録音に対して"1つ以上の不快感"を報告していました。その不快感の中で最も多かったのが"法的責任 (98人53%) "でした (図)。この結果は、録音が専門医の説明の内容や説明への意欲に影響を与える可能性があることを示しています。

図 患者の録音に対する医師の不快感の理由



専門医の77%は、"録音が患者にプラスの影響を与える可能性がある"と考えていることが分かりました。一方で、「録音が患者と医師の関係にどのように影響するか」という質問では、49%はその影響はマイナスであると考えていました。この結果で興味深いのは、年配の専門医や臨床経験年数の長い専門医が、患者の録音をプラスにとらえる傾向があることです。これは、患者とのかかわりの経験が増えることで、録音が患者と家族にどのように役立つかについての理解が深まり、法的責任に対する潜在的な懸念が減るということを反映している可能性があると論文内では説明されています。つまり、録音の利点について若い医師に教育することは、患者が録音しやすい公平な環境につながる可能性があるということです。

この研究では、診療の録音に関する患者と医師の方針および倫理的な問題に取り組む必要性も強調しています。専門医の85%が、患者は録音する権利があると回答した一方で、同じく92%が患者は医師の同意なしに記録を開始するべきではないと回答しました。また、専門医の70%は医師には録音を拒否する権利があると回答し

ました。この対照的な回答がされる現状では、担当医師によって、患者が録音できるかできないかが変わってしまい公平性を確保できません。そのため、この論文では、録音や他のコミュニケーションに関して明確な指針を開発する必要性を強調しています。

テクノロジーの発展をコロナウイルスの蔓延が後押しをすることによって、医療のあり方も変わりました。録音やオンライン会議用ツールによって、今まで医師の説明に立ち会えなかった家族や介護者に説明の共有ができるようになりました。便利になった一方で、患者・医療者の両者に、これまでにはなかった悩みや困り事が出てきます。これまでになかった困り事を怖がるばかりではなく、最新技術との共存の方法を模索することが重要であると思います。

みなみりお：2018年3月東北大学医学部保健学科看護学専攻卒業。東北大学病院で3年間看護師として勤務。2021年4月東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア看護学分野に入学。現在博士課程前期2年生。

この商品の内容に関するお問い合わせは[仙台事務所](#)
お急ぎの場合は、TEL (022) 261-7660におかけください。
※土・日・祝は対応しておりません。

ご注文に関する内容・変更・追加などのお問い合わせは、
お客様センターフリーダイヤル0120-057671に
おかけください。

※本サービスは事情により予告なく終了することがございます。
あらかじめご了承ください。

ページトップに戻る



Copyright© nissoken. All Rights Reserved.

お客様センターフリーダイヤル 0120-057671